



空海を思ふや涯なき月の径
牡蠣食べゆつくり滅びたる王家
坪井直逝くあまたの鴨の立ち睡り
冬木みな囁いてゐる軽井沢
顔上ぐる度に老けゆく蓮根掘
自由とは少しのゆとり冬木立
いささかの外連ありけり穴惑
熊の掌をコリコリと喰ふ哈爾濱よ
小夏日や巫女の跨る馬の鞍
真直ぐとは行かぬが進め青檸檬
雪起こし飛べぬ欄間の雀かな
踏み出しの戴帽式や一位の実
アフガンや顔の老いたる子に冬日
陸奥に爺捨山や霜の声

国見敏子
矢島 恵
有手 勉
清水逍径
山崎妙子
小池孝雄
木村安以
小熊 旭
渡嘉敷皓駄
佐久間梨江
山田勝文
岩間嘉一
上脇邦子
高橋良子
辰野利彦

土塊の頑固一徹冬に入る
灯りて濡杭のごと枯野宿
御拾ひで客僧来らるお取越
汝を看るは蜜月のやう冬夕焼
年の空鎧を纏ふ十五歳
菓子店の煌めく並木クリスマス
寝た切りの弟の一期白障子
鉄塔を鉄たらしめる寒の雨
冬空で繋がっている縁かな
鉄色の鱧の鉄干し年の市
言霊や指にさよなら十二月

荒川美恵
幹 自聲
平野規子
宮坂やよい
青木義典
山岸俊一
田中眞由美
増田義幸
柿谷有史
垣内みか
吉島節子

脱稿の後は夜長の深海魚
土壇場にトタンを叩き花梨落つ
もう糸編むことのない手が累々
野沢菜を漬け込むといふ里言葉

石井紀美子
森 千恵子
田原章弘
上岡裕美

岳俳句の現在 二月 ⑤10

― 同人集・岳集・青雲集から

宮坂 静生

巻頭寸言。「岳新年句会」がコロナウィルス蔓延の隙を縫って滞りなく実施できたことは僥倖であった。判断や行動にも瞬発力が不可欠なことを、状況が安定しない日常ではひしひしと感じる。ときにこれからは不安な微粒子が蔓延する状況こそが日常なのかも知れない。俳句は危機に強い文芸である。子規が信奉した進化論哲学者スペンサーの「最簡短ノ文章ハ最良ノ文章ナリ」(「筆まかせ」)の「スペンサー氏文體論」(明治二十三年)は、最短詩型俳句の評価に通じる。知的感受性による瞬発力を鍛えることがいよいよ大事になろう。

滅びたる王家―歴史をいかに詠むかへの挑戦

牡蠣食べゆつくり滅びたる王家 矢島 惠

王家というとヨーロッパのウィーンのハプスブルク家やミュンヘンのバイエルン王家を連想する。さらに「滅びたる」の形容から思い浮かぶのは後者のルートヴィヒ二世だ。戦争嫌いな王は政治よりも趣味の芸術の世界に深入りし、ワーグナーら音楽家を大事にした。シュタルンベルク湖で謎の死を遂げている。過日のドイツの旅で、この湖を遠望した。牡蠣好きはヨーロッパ人に多いが、王もそうであったか。歴史を詠むにはゆつたりと詠む。作者の詠みぶりは王家の滅亡を句材にするのにぴったりの感がある。

空海を思ふや涯なき月の径 国見 敏子
私費で遣唐使に加わった空海が真言の教えをわが国に齎した功績は計り知れない。作者はそれを「涯なき月の径」といった。高野山では今も空海を生き仏のように敬い朝餉を供えている。弘法大師はこころの支え。特定な信仰を超えた存在は国民の意識に根づいている。南無大師遍照金剛は民衆の無意識に喰い込んでいるのであろう。久方ぶりの力作である。

坪井直逝くあまたの鴨の立ち睡り 有手 勉

坪井直への追悼句。坪井は広島原水爆被害者団体の代表、日本の同協議会代表委員。二〇二二年十月二十四日逝去。湖沼の鴨は浮寝が詠まれることが多いが、「立ち睡り」は珍しい。関わりがない姿勢にかえて、それを追悼の姿勢と見たのである。ともすれば、忘れられがちな原水爆禁止運動の先頭に立って被害者の声を上げ続けてきた坪井の粘りへ、人よりも鴨が感謝したものか。社会詠を得意とする作者の苦心の作。

冬木みな囁いてゐる軽井沢 清水 道径

軽井沢の冬木の「寒いなあ」との呟きが新鮮。どちらかというと、軽井沢の樹木は夏向きの清楚さを売りにしている。

冬は連日零下の高原。さすがの樅や落葉松も本音が出る。

自由とは少しのゆとり 冬木立 小池 孝雄

すばらしい良識が滲む。冬木立を据えたゆとりが美しい。

いささかの外連ありけり穴惑 木村 安以

秋の終り。蛇が穴に入る。さてどの穴にと戸惑う。それが「穴惑」。気取りがちよっぴり気障。それが楽しい。余裕だ。

熊の掌をコリコリと喰ふ哈爾濱よ 小熊 旭

哈爾濱を熟知の作者。短いが冬は寒い。零下二四度とか。雪も多い。その冬に熊の掌をコリコリ食べる。あっけらかんとした、こんな句を私も作りたい。巧みな作。

小夏日や巫女の跨る馬の鞍 渡嘉敷皓駄

沖縄の伊平屋島での「田名ウンジャミ」(旧暦七月十七日)

今月の秀句

顔上ぐる度に老けゆく蓮根掘 山崎 妙子

俳句はデフォルメにより本質が際立つ。さりげないこの手を心得ている作者。泥田の蓮根掘。屈んだ姿勢を正し、顔を上げる。気づいた者は、はっとする。別人かと紛う。老けている。放射能汚染地域の話ではない。蓮根掘り作業の厳しさを捉えた秀作である。

詠。白装束の祝女(巫女)が馬に乗り浜で海神を迎え豊漁や豊作、さらに安全航海を祈願する。鞍は螺細細工の鞍もあるとか。作者から歴史民俗資料館の特別展示資料を頂戴した。

真直ぐとは行かぬが進め青檸檬 佐久間梨江

私は青い檸檬。ともかく進め。自分に言い聞かせる純情さ。

雪起こし飛べぬ欄間の雀かな 山田 勝文

お洒落な、粋な馴染の座敷をふと。雪を呼ぶ雷が鳴る。欄間の雀が驚いて羽搏くが、かなしいかな「わたしや囚われ、とべません」。三昧の音でも添えたい。作者は諏訪の通人。

踏み出しの戴帽式や一位の実 岩間 嘉一

看護師になる感激の戴帽式。私も何回も列席し、思い出すだけでも清冽さに胸詰まる。赤い楚々たる一位の実が可憐。

アフガンや顔の老いたる子に冬日 上脇 邦子

弱い冬の日に当たる「顔の老いたる子」とは慟哭。切ない。

陸奥に爺捨山や霜の声 高橋 良子

信濃には姨捨山。陸奥には爺捨山。陸奥へは近づかないことにする。作者は「とうげの旗」での民話の書き手でもある。

頑固一徹が土塊とは北国の冬

土塊の頑固一徹冬に入る 荒川 美恵

素朴さに徹して自分の抛り所、大地を究める姿が読み手に

伝わり感動を呼ぶ。先年、作者の住する釧路町の近くまで行き、釧網本線の枕木を悠々と過るきたきつねに目を瞠った。

灯りて 漣杭のごと 枯野宿 幹 自聲

航行する船のために水深を知らせる漣杭。枯野の宿に灯が入ると、曠野の漣標のようだという。着想・表現がいい。

今月の秀句

雪降れば 遙か唐牛健太郎 辰野 利彦

胸が痛む作。雪降りは遠い昔を一気に回想させる。一九六〇（昭和三十五）年は戦後最大の民主化運動の分岐点を孕んだ年であった。いわゆる日米安保闘争の高揚と衰退により日本中が揺れた。中でも全学連（全日本学生自治会総連合）は全国一四五の大学の自治会組織をまとめ民主化闘争をリードした。その委員長が唐牛である。しかし、彼は前年に全学連の生ぬるさを批判してブント（共産主義者同盟）を結成し、全学連の分裂の火種を作っていた。日米新安保条約は一九六〇年六月十五日に自然成立し、以後、闘争は衰退の一途を辿る。唐牛は弁舌に愛嬌があり、愛された男であったが、一九八四年、四十七歳、直腸癌で逝去した。作者は自身の青春と重ねて忘れ難い思いがあるのであろう。私は唐牛の前の組織、香山健一・中嶋嶺雄の時代にいささか関わった。

いかにも鉄塔と、黒ずんだ鉄材の寒々とした存在に喝を入れられた思いがしたもの。地味な作であるが、四十代の作者の眼が捉えた腹の坐り方に惹かれる。

冬空で 繋がっている 縁かな 柿谷 有史

同じく四十代の作者。視力障害を背負い生き抜く柔軟さに私は最高に敬意を抱く。上記の「冬空」への思いは悟りに近い。ああ、こんな風に生きるのかと気づかされる。

鉄色の 鱧の 鉄干し年の市 垣内 みか

高知は冬の鱧の鉄干しが名産品。年の市に出たもの。「鉄干し」とは地域の冬の空気が伝わる見事なことばだ。

言霊や 指に さよなら 十二月 吉島 節子

九十二歳の発想が若々しい。手は十指であるが、今年の手は来年の手でない。今年も終わる。「さよなら」という。また来る年もお願いとでもいうものか。ささやかな詩がある。

同人集・岳集から推薦候補作をあげる。

人生の 今が 本物の 年の夜 唐澤南海子
愉しんで 老いて ゆきたし 根深汁 横地 妙子
生死なき 虚空の ありや 藪枯らし 丸山 公子
茎の石 乗せる ため 夫大事にす 堀川 節子
木枯しや 癒ゆる 兆しに 揺れながら 小林さなえ
テーブルの みかん少しも 減らざりき 三村 惇子

御拾ひで 客僧来らる お取越 平野 規子

「御拾ひ」がいい。歩くことをいう女房言葉。作者はご実家がお寺さんとか。このようなことばを自在に使えること自体が貴重。「お取越」は親鸞忌を一ヶ月繰り上げ十月に行う報恩講。「岳」には名人が多いが、飛驒高山のことば名人である。

汝を 看るは 蜜月の やう 冬夕焼 宮坂やよい

作者のお連合いが四月に癌を宣告され、専心看護、暮れ近く亡くなったという。諏訪の句会リーダーとして細心抜群。日々の柔軟な振舞いに、上記の哀しみは知らないでいた。十分に看護した、「蜜月」の思いが以後生きる支えとは立派。

年の 空鎧を 纏ふ 十五歳 青木 義典

少年剣士の姿か。三十代早々の注目の若手。隙がない。「年の空」に主人公の思いが深い。作者の思いでもあろう。

菓子店の 煌めく 並木クリスマス 山岸 俊一

並木が気持を和ませる。温かな光景は作者の心の表現だ。

寝た 切りの 弟の 一期白障子 田中真由美

姉から見た弟の半生に思いを深くする。あたら青春も寝たきりとは。これが与えられた宿命とはいえ、白障子が切ない。生きているだけでも幸せとと思っているのである。

鉄塔を 鉄たらしめる 寒の雨 増田 義幸

芋食へば 過ぎし 心の 虚空かな 宮川志津子
山風の 乾ぶが 渡りいよよ雪 米山 節子
牧の 冬天 狗巢病の 樺の 樹々 小野 文雄

青雲集

脱稿の 後は 夜長の 深海魚 石井紀美子

気持が高揚して原稿を書き終えた。安堵。折から夜長に自在な時間を楽しんだ。よかよかといった作。

土壇場に トタンを 叩き 花梨落つ 森 千恵子

なんの土壇場か。深刻な話、あるいは議論沸騰の最中。いいタイミングに花梨の実がドスンと大きな音を立て落した。無難作の造作の巧みか。感度がいい。

もう 毛糸編む ことのない 手が 累々 田原 章弘

年老いた手か。毛糸編みはある若さのシンボル。意外な気づきが面白い。内省的な作者。

野沢菜を 漬け込むといふ 里言葉 上岡 裕美

大変さを包み、「漬け込む」がやさしい。ここに詩情がある。

青雲集から推薦候補作をあげる。

甲斐の 冬休む 間もなく 御礼肥 上石 哲男
我は 今 漬物石の 形良き 齋藤 元紀

○気になる表現―着想について

原句 残る雪天狗の朱下駄鮮やかに

大月 英晴

まとまっている句である。表現に欠点があるわけではない。目の付けどころを考えたい。大寺に天狗が祀られ、朱の下駄を履いている。暖かくなり出し、雪も消えかかっている。残雪の幾分汚れた白さと天狗の履く下駄の朱色との対比に目が留まった。意気込む初心者が目に留める句材には違いない。が、誰でもまず目を付けるところで、はっきりいうと平凡。これは私の俳句入門者へのアドバイスであるが、自分の生活を見つめた方がいい。あるいはいきいきした山川草木を句材に選んだ方がいい。生きるか死ぬかという大袈裟なことではなくとも、なにを詠うか、どこへ目を付けるかで作品の質が決まる。一番は生身の人間の素朴な気持が感じられるのがいい。繰り返しになるが、決して詠ってはいけないという句材ではない。これから伸びる新人はどのような句材に着眼するのがいいか、参考までに私の感想を述べたものである。

○推敲し添削する―なにを残し、なにを省略するか

原句 黄金モチ赤い実満ちて期は熟す

河原田富男

添削 赤い実の並木に満ちて黄金糰

「モチ」は、漢字か平仮名にするほうがいい。図鑑に載る厳密な学名は片仮名であるが、俳句では片仮名は硬い感じを受ける。「期は熟す」は説明。「赤い実満ちて」で連想が及ぶ

ので、場景を広く取り、「並木」を出してみたら。

原句 餓死の子よ無力な吾よ冬苺（難民の子供達に） 小林多美子

添削 難民の子へ無力なり冬苺

表現したい対象、気持は十分わかる。ことばを沈めることで、説得力がある。注の「難民」を生かし、「よ」を省略。

原句 亡き母の新米研ぐ手ひび割れて 長谷川陽子

添削 新米を研ぎゐし母のひびの手よ

「亡き」は過去表現にすれば要らない。結句をしっかりと。

原句 いろいろの落葉木椅子に休みけり 内田 周穂

添削 とりどりの落葉木椅子に休みけり

「とりどり」の方が、わずかでも躍動感がある。

原句 川の上の海の上の雲小春かな 山本 正子

添削 黒部川河口の雲の小春かな

「黒部川河口にて」とある、注を生かして具体的に。

◎個人相談コーナー第三回 赤澤久喜

どの句が採れるか。投句作品から、このように判断しました。参考に投句全部を記します。

1 「香香に入歯欠けたり炬燵酒」 2 「初雪やマスクの湿めり早かりし」 3 「一服の蛙に蒲公英帰り花」 4 「山壁の影濃く深み霜の朝」 5 「母と打つ風船バレー雲降る」 6 「注連を緋い五黄の寅よ七巡は」

【応対寸評】 1は実際でも句材がありにも俗。2は初雪の中でのコロナ予防マスクか。面白みはどうか。3は素朴さはいいがやや平凡か。4はわるくない。幾分類想があるか。5は採れます。6は苦心の作。